

2026 年 9 月 14 日

日立社員、第 68 次南極地域観測隊に選任

設営部門を取りまとめる設営主任として、南極観測活動の基盤を支える役割を担う



南極地域観測の中心となる昭和基地
(写真提供：国立極地研究所)

株式会社日立製作所(以下、日立)の社員である船木覚(ふなき さとる)が、第 68 次南極地域観測隊に選任されました。船木は 2026 年 7 月 1 日付で大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所(以下、極地研)に出向しており、国内で南極越冬業務に向けた訓練を重ね、2026 年 11 月に南極に向けて出発します。設営部門の機械(発電機制御盤)担当として 1 年超にわたり南極で任務にあたり、2028 年 3 月に帰任予定です。また、越冬隊内では設営主任を務め、設営部門をとりまとめて隊長を補佐します。

南極地域観測は、南極条約に基づく国際協力のもと国が実施する事業であり、1956 年の第 1 次隊派遣以降、長年にわたり隊員を派遣しており、本年で 70 周年を迎えます。日本の活動拠点となる昭和基地では、超高層物理、気象、生物、地質など幅広い分野で観測活動が続けられており、地球環境問題が深刻化する中、その活動の重要性はますます高まっています。

日立の社員は、1966 年に出発した第 8 次隊から文部省あるいは極地研に出向したうえで観測隊に参加し、60 年にわたり昭和基地の発電機制御盤を中心とした機械設備のメンテナンスや保守管理に携わってきました。現在も第 67 次隊として、香月将吾(かつき しょうご)が観測隊に参加し、南極の地で活躍しています。

今回第 68 次隊に選任された船木は、第 59 次隊に参加した経験を有し、これが 2 回目の参加となります。高いリーダーシップと豊富な業務経験を生かし、越冬隊の半数以上を占める設営部門を統括する設営主任として基地運営に貢献します。具体的には、昭和基地における設備の維持・運用や物資管理を統括し、観測活動および隊員の生活を支える重要な役割を担います。船木はこれまでに培った知見を生かし、安全かつ円滑な観測活動の実現に貢献していきます。

日立は、今後も、「優れた自主技術・製品の開発を通じて社会に貢献する」という企業理念のもと、これまで培ってきた先端技術やノウハウの提供を通じて極地研の南極観測活動に協力し、地球環境の保全と持続可能な社会の実現に貢献していきます。

隊員に選任された船木寛(ふなき さとる)のプロフィール

1995 年日立製作所入社。インフラ制御システム品質保証本部に所属し、大みか事業所(茨城県 日立市)で製造される社会インフラ制御システムに使用するハードウェアコンポーネント製品の品質保証業務に従事。2017～2019 年にかけて極地研に出向し、第 59 次南極地域観測隊の越冬隊に、発電機・制御盤を担当する設営隊員として参加。越冬期間中、昭和基地の電力を無停電で維持し、越冬任務を完遂した。



船木からのコメント

初めて隊員として南極昭和基地に赴いた際は、未知の環境への期待を持って任務に臨みましたが、越冬期間を通じて、隊員の生活や観測活動を支える責任の重大さを強く実感しました。

帰国後はその経験を振り返り、自身の役割の重さを改めて認識するとともに、培った知見を次にどう生かすかを考えるようになりました。そうした中で、再び挑戦したいという思いが芽生え、このたび第 68 次隊員として参加する機会をいただきました。

今回は設営部隊を取りまとめる立場として、設備の維持・運用や基地の安定的な運営に責任を持って取り組む必要がありますが、これまでの経験と訓練を通じて得た知識を生かし、任務を着実に遂行していきたいと考えています。

また、隊員同士の連携の重要性を改めて感じており、今回の隊員メンバーにも恵まれていると感じています。仲間と力を合わせ、安全かつ円滑な越冬任務の完遂に貢献してまいります。

本任務に挑戦できるのも、職場のメンバーの支えと理解があってこそです。日頃より温かく支えていただいていることに感謝するとともに、その想いに応えられるよう、現地での任務に真摯に取り組んでいきます。

南極観測パートナー企業認定制度について

日立は、長年、南極地域観測事業に顕著な貢献を継続している企業として、極地研より「国立極地研究所 南極観測パートナー企業」に認定されています。

[南極観測パートナー企業認定制度](#) | [民間事業者とのパートナーシップ](#) | [南極観測](#) | [国立極地研究所](#)



お問い合わせ先

株式会社日立製作所 デジタルサービスビジネスユニット インフラ制御システム事業部
[インフラ制御システム総合お問い合わせ：インフラ制御システム：日立](#)

以上